
恐怖の黒い水

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖の黒い水

【Zコード】

Z7349V

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

みなさんも学生時代に一度はその学校に関する怪談話を耳にしたことがあるだろう。だけどその大半は根も葉もない作り話で、妙に恐怖感ばかり煽るようなものばかり。そして誰かがいざ真相を解明してみると、大抵はいたずら好きの子が流した単なる噂か、あるいはくだらない仕掛けによる恐怖演出。おそらく、もう散々聞き飽きてているのかもしれない。

だけど今回の話は断じてそんな作り話ではない。これはこの高校で本当にあった出来事からできた呪い話。始まりはある女子高生が授

業と授業の間の10分休憩、トイレで目撃したことだつた。夏といえばやつぱりホラー、初挑戦だけど、私がみなさんを涼しくする身の毛もよだつような恐怖をお届けします。それでは、どうぞよろしくお願いします。

1、始まりは噂から（前書き）

白井香奈 16歳

この物語の主人公で県立水原高校の2年生。休憩時間にトイレで恐ろしい光景を目撃する。そのことを彼、青山知輝君に相談し二人はその真相を解明していくことになる。

青山知輝 17歳

主人公の同級生で同じ2年3組の男子。彼女の香奈とは4カ月前のバレンタインデーに本命チョコをもらって、そのときから付き合っている。彼女からトイレで目撃した恐怖体験を聞き、一緒に真相を解明していく。

1、始まりは噂から

思えば始まりはくだらない噂話からだった。そのときは少し氣に留めていただけだったけど、まさか本当にその通りのことが起こるとは……。

（1年前の夏）

初夏の日差しが眩しいある日、昼休みに弁当を食べ終わった僕は教室で自分の席に座っている。休みが始まつて10分近く、窓から外を見るとそろそろ昼ご飯を食べ終わつてくることなのか、ちらほら運動場に人が出て来始めた。

（さてと、そろそろ僕も行こうかな）

そう思つて席を立ち上がろうとしたとき、教室の前の入り口から声が聞こえてくる。

「おーい！ ともきー！」

そつちを見ると呼んでいるのは友達の赤田数貴だ。彼とは入学当初から友達で、普段からよく一緒に話したり遊んだりしている。

「おうつー！」

手を挙げて呼び掛けに答え、席を離れて彼のほうに駆け寄る。「外に遊びに行こうぜー！」

「行くか

二人は廊下を歩いて階段を下り、1階の靴箱に並んで歩いていく。

「あつ、お前さ、黒い水の噂、聞いたか？」

「黒い水？ なんだそれ？」

「あー、じゃあ、まだ聞いてないのか。今ちょっとした話題になつてんだよ、聞くか？」

「聞くよ」

黒い水、それを聞いただけでは始めどんな話か全く分からなかつた。だけどなぜかそのとき、妙な感覚が背中を走り、少し寒気がした。

今思えばそれは無意識に予感したのかもしれない、何か恐ろしいことがいつか起ると。

2、トイレの黒い水

「Jの前、彼女から聞いたんだけど。Jの学校のある女子トイレの水が真っ黒に染まることがあるらしいんだ」

彼は高校に入学してからまだ2カ月ちょっととしか経っていないのに、なんと同じクラスの女子と付き合っている。噂はその彼女から聞いたようだ。

「あつ、黒に？ 赤じゃなくてか？」

僕は始めてこの話にこうこう疑問を持った。女子トイレとこう場所から直感的に怪談話だと気付いた僕は、それが普通なら血の色を連想させる赤ではなかつたから。

「ああ、それは俺も不思議に思つたんだ。でもどうも黒らしいんだ」

「へえー、そうなのか」

「うん。なんでもさ、昔この学校の女子トイレで髪を黒に染めていた女子生徒の呪いなんだよ」

「なるほど、だから黒か。ん？ でもなんで髪なんか染めるんだ？」

「第一校則で禁止されないか？ 毛染めは？」

「そりなんだよな。それにここ最近は誰も見ていないらしいし」

「じゃあ、单なる誰かの作り話じゃないか？」

「そりでもないらしい。どうも彼女が言つには、その黒い水を見たものは呪われるらしいんだ」

「呪われる？」

「そうだ。そして黒い水を見た次の日から酷いいじめを受けて、最後には耐え切れず自殺することになるんだよ」

「まじか。でもそれも作り話じゃ……」

「違うらしいぜ。何しろ本当にあつたらしいからな、10年前に。黒い水を見たある女子学生が酷いいじめを受けて、その後北校舎の屋上から飛び降りて自殺した話が」

「おー！ おー！ ちょっと待て！ それってまさか……」

「そうだ、あの血痕だよ」

僕はその話を聞いたとき本当に驚いた。実はこの学校には誰も近づこうとしない場所があるって、そこが北校舎北側の真ん中の下のコンクリートのひび割れ。その隙間には未だに流れ落ちずに赤黒い血痕が残っていた。

3、恐怖の序章

「そうか、それで。やつぱり単なる血痕じゃなかつたんだな」「だな」

「ん？ でも待てよ、つてことはその自殺つて10年も前の話つてことだよな」「ことだよな」

「そうだな」「そうだな」

「じゃあ、なんで流れてないんだ？ 血痕？」

「そこだよ。だから呪いだつて言われてんだよ」

「そういうことか。なんか嫌な話だな」「ああ」

ここで一人は1階の靴箱にたどり着き、靴に履き替えた。

「それで、話は終わりか？」

「まあ、あまり気にすんなよ。噂は噂なんだからよ」「そうだな。そうするよ」

そのまま一人は外に出ると、運動場へ走つて行つた。

（現在へ）

今思つとそのときは話を聞いただけで、少しだけ気に留めてはいたけど、そんな重要なことだとは思つていなかつた。だけど現実は違つた。6月2日の木曜日の今日、去年あの噂話を聞いてからほほ1年後、目の前にいる彼女が口にしたのだ。

「ねえ、聞いて、ともくん、聞いて。私、見ちゃつたんだよー。黒い水を！ 助けて！ お願い！ 私を助けて！-！」

僕は思わず耳を疑つた。本当にそんなことが起つるとは全く想像してなかつたから。しかしその彼女の言葉は、恐怖に満ちた話のほんの序章にすぎなかつた。

4、目撃したこと

「おいつ！ それホントか？ かな！」

「ホントだよ、ホント」

彼女の目を見開いてあまりにも真剣な表情、どうやら嘘ではないようだ。

「分かった。聞いてやるから落ち着いて話してみろよ」

「うん」

すると彼女は1回大きく深呼吸して落ち着きを取り戻し、目撃したこと話を始めた。

（回想シーン）

6月2日の木曜日の昼、4時間目が終わって教室で友達と一緒に弁当を食べ終わった私は、一人で教室を出て4階の廊下の東側、階段の手前にある女子トイレに入つて行く。去年のこの時期に噂になつた黒い水の恐怖、ちょっと覚えてはいたけどこのトイレで起つたかまでは知らなかつたし、怖いからといってトイレを我慢するわけにもいかないし、あえて気にしないようにした。

しかしこつもように個室に入り、おしつこを済ませて便座から立ち上がり水を流した。始めは普通に汚れのない透明な水だつた。だけど流れでから2秒ほどしてみるとうちに水は黒く染まり、流れていき便器には黒い水が溜まつた。

「うつ、うそ」

少し小さな声でそれだけ呟いたけど、それ以上は恐怖で全く言葉にならなかつた。それから私は逃げ去るように急いで洗面所に向かい蛇口をひねると……、そこから出たのもまた黒い水だつた。

5、彼の反応

それを見た私は急いで蛇口をひねって水を止めて、結局手も洗わずにトイレを出てしまった。

「どう思つ? ともくん」

「なあ、その前に一つ確認してもいいか?」

「何?」

「かな、手、洗つてないだろ」

「……うつ、うん」

図星だ、彼の言つとおり私はトイレを出た後も蛇口をひねるのが怖くてまだ手を洗つていない。

「汚いな、ちょっと来い」

「えつ」

そう言つと私は彼に左手をつかまれて少し強引に水道がある廊下の真ん中に連れて行かれる。そして右手で蛇口をひねり水を出してくられた。

「ほら、洗いな」

「うん、ありがと」

私は恐る恐る両手を流れ出る水道水に差し出し、30秒ほど手を流し洗い、ハンカチを出して手を拭く。

「さっきの話だけど、かな、本当に見たのか? 黒い水を?」

「ホントだよ、うそじゃないよ!」

「そうか。ちゃんと明るかつたか? トイレ?」

「うん。だつて電気ついてたし、今日、外晴れて、こんなに明るいし」

「なら、見たのは間違いなよ!」

どうやら彼は事実として受け止めてくれたようで、私は少しほっとして安心した。

6、
確認

「じゃあ、信じてくれるんだよね、ともくん」

「ああ、見たことはな」

「え」

な……」

どうせ、彼は私が見たことは事実として認めてくれる。そのものを信じてくれたわけではないようだ。

「やっぱり、信じてくれないの？」

「いや、そういう意味じゃない。いくつか確認したいことがあるんだ、黒い水が何だったのか。いいか?」

うん

「 そ う だ な、 ま ず は 、 真 っ 黒 だ つ た か ? 」

真黒みたしに

そ二か なら サビと かは なれ そ二か な
髪の 手と かは 落ちて

1

「ラボの洞」一書の序文

卷一

۱۷۸

「なるほど。となると水道管や、誰かのイタズラではなさそうだな。
まあ、でも一度タンクの中は確認しないとな」

「それは錯覚の可能性もある」

גְּדוּלָהָה

「残像つてことがあるだろ。恐怖感からそう見間違えたつていう

そんなはずないよ。
たゞて私！
見たもん！」

落ち着けよ かな まあ もがみにせよ ダンケの中は確認しな

いとな

「……えつ、もう一回入るの？ トイレ」

「当たり前だろ。だけど今日の放課後だな、昼間は僕が入るわけにはいかないから」

「いやだよ、私」

「そういうわけにはいかないだろ。かなが見たんだから。まあ、かなが来ないならずっと怖いままだけどな」

「そんなん……」

「どうする？」

「……分かつた！ 行くよ、行けばいんでしょう！」

「なら決まりだな。時間は今日の放課後8時半、いいな」

「うん」

仕方がないので泣く泣く私は彼の要求に応じることになってしまつた。

7、意見

昼休みに彼女から黒い水を目撃した話を聞いた、しかし彼女が僕以外にも黒い水の話をしているかどうかは分からぬが、誰か他の人に話してみて意見を聞く必要がある。

彼女は女子テニス部、僕はサッカー部に所属しているのだが、さつそく放課後の練習の休憩時間、友達の赤田君に話してみた。

「かずきー、おつかれさま」

「おつかれー、やっぱ、夏の練習は暑いしきついな」

「うん。あのさ、ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど……」

「いいけど、なんだ？」

「彼女が見たらしいんだよ、例の黒い水を」

「おい！ それ、マジか！」

「うん。まあ、まだ確認してないから本当かどうかは分からぬけど」

「見間違えってこともあるもんな」

「そうそう。でも心配だな、彼女いじめ受けないといいけど……」

「それはお前次第だろ」

「えっ」

「だつて恋人だろ。彼女のことはなんとしてでも守つてやらな」と

「そうだな。僕が守るしかないもんな」

「頑張れよ」

「うん、ありがとつ」

「あつ、そうだ！ 協力するよ、俺らも」

「いいのかー？」

信じがたいホラー話とはいえ僕も少なからず怖い気持ちはある。そのため彼の協力は僕にとって非常に心強かつた。

8、親友

私は今日、怖い気持ちを我慢してずっと学校にいるけど、正直不安でならない。本當なら彼以外にも田撃したことを相談したかったが、誰かにするとそれをきつかけにみんなに知られていじめを受けるのではないかといつ恐怖にかられていた。

しかしこのままでは流石に精神的に辛かつたので、彼と同じくくらい信頼できる親友で同じ女子テニス部の黄田愛里ちゃんに相談してみることにした。

「ねえ、えりちゃん」

さつそく私は放課後の部活動の練習、途中の10分休みに彼女に話しかける。

「何？ かなちゃん」

「ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど、いいかな？」

「いいよ」

「ありがと。でも、ここにじゅ……」

「場所変えよつか？」

「うん」

私が少し話しつくそうとした、それだけで察してくれたのか彼女は私の左手を握つて、みんながいるテニスコート周辺から、校舎内の1階の廊下誰もいない静かなところに連れていつてくれた。

「私、分かるよ。かなちゃん、何か怖い思いしたんでしょ？ 手握つててあげるから、話してみて」

「ありがとう、ホントに」

こういうときの親友の配慮は本当に心強いもので、私は一呼吸置いて気持ちを落ち着かせて話を始めた。

9、4人の仲

「実はね、私見ちゃつたんだ、黒い水を

「黒い水つて……、あのトイレの？」

「うん」

「ねえ、それってどこのトイレで？」

「南校舎4階の東側のトイレだよ」

「そつか。そこだつたんだ」

「知つてるよね、えりちゃんも黒い水の呪い

「知つてるよ。いじめられて最後には自殺に追い込まれるつていう

「私、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。それにともくんがいるじゃない、かなには

「ただけど……」

「それも私たちもいるしね」

ここで彼女が私たちと言つたのは自分が付き合つている彼の赤田君も入れてのことで、私と彼の青山君を合わせて4人はとても仲がよかつた。

「ありがとう。でもさ、我今日また行くことになっちゃつたの、そのトイレ

「どうして？」

” ピピピッ、ピピピッ ”

そのとき彼女の問い掛けを遮つて高い携帯の着信音が鳴り響いた。

「あつ、ちょっと待つて」

「うん」

「彼からだ」

珍しく部活動中に来たメール、それは彼女の彼からだつた。

10、4人一緒に

彼女は携帯を開いてついさっき来たメールを読んでいる。

「何だつて？」

「うん。同じだつたみたい」

「どういうこと？」

「かずきくんもちょうどともきくんから相談受けたみたいで、放課後一緒に調べに行かないかつてや」

「そうだつたんだ」

「よかつたね、かなちゃん。4人一緒に怖くないでしょ」

「うん。ありがとう」

私は親友の優しさを実感し、不安だつたけど大分気持ちが楽になつた気がした。

赤田君はポケットに隠し持つていた携帯を出して、彼女にメールを送つている。

「彼女、大丈夫なのか？ ホラーつて」

「大丈夫だよ。えりとこの前一緒にホラー映画見に行つたから」

「そつなんだ」

「しかもさ、それ彼女の誘いでさ、かなり怖い奴だつたよ。それに彼女平気な顔して見てたし」

「それはすごいな」

「だろ！」

“ピピピッ、ピピピッ”

すぐには彼の携帯の着信音が鳴り、返信が返つてきた。

「そうか。なんか同じだつたみたいだぜ。えりもかながら相談受けたところだつてよ」

「そつか

「じゃあ、決まりだな。部活終わつたら4人で行こうぜ」

「そうだな」

このあと彼が彼女に集合場所、時間などの確認のメールを送り、人一緒に調べに行くことが決まった。

11、待つていろと

6月の中旬の1年で最も日が長い初夏の時期、部活動の練習が終わるのは遅く、今日もすでに8時をかなり回っている。私たち一人は練習着姿から制服に着替えて、待ち合わせ場所の南校舎4階の階段の廊下に来ていた。日没後、放課後の校舎は当然明かりなどあるはずもなく、ほぼ真っ暗で静まり返っている。その中を私たちは携帯の明かりで足元を照らし、恐る恐る階段を4階まで上がってきた。時間は8時20分過ぎで待ち合わせ時間の8時半になつておらず、彼一人はまだ姿を見かけない。

これから4人で一緒にあの恐ろしいトイレを調べるのだが、すでに正直今でも夜の学校というだけで非常に怖く、できることなら自分だけ家に帰つてしまいたい気分である。さらにまだ練習をしている部活があるのだろうか、たまに聞こえてくる声が風で木が鳴る音に混じつて余計に恐怖感演出していた。

「ねえ、えりちゃん」

「何？」

「怖くない？」

「ちょっとね。でも私、結構ホラー好きだから

「そなんだ」

「うん。だからね、今ちょっとワクワクしてるんだ」

初めて知つたことだがどうやら彼女はホラーが好きなようだ、怖い話が専らダメな私とは正反対である。

私たちが来てから3分ほど経つたのだろうか、私の両肩に突然2つの手が乗つかつてきた。

12、怖がりな私

「 キヤーーー！」

私は驚きのあまり両手を振り上げて、大声を上げて叫んだ。
「 ばかっ！ 何すんだよ！」

「 えっ」

私は恐怖のあまり目を瞑つていたせいか、一瞬何が起きたのか全く分からず、どこからか分からず聞こえた声だけが返つて恐怖感を搔き立てる。

「 わあー！ キヤーーー！」

「 だから叫ぶなって言つてんだろ！」

今度はそう言われて無理矢理口を押さえられ、すると抵抗できなくなつた私は静かになる。

「 目を開けて、こらん、かな」

右横からえりちゃんの声が聞こえてくる。私は勇気を出して恐る恐る目を開けてみた。すると目の前には暗いけど、はっきりと赤田君の姿があつた。

「 はあっ」

私の口を押さえられていた手は離され、ため息が一つ漏れると落ち着きを取り戻し、そして後ろにいたのがともくんだと認識できた。

「 もうっ、驚かさないでよ」

「 ジめん、ジめん。しかしお前、ホントに怖がりだな」

「 仕方ないでしょ。それに見ちゃつたんだから」

「 それもそうか」

「 おいつ、余計な話してないでさつと調べよつぜ」

「 そうだな」

「 うん」

赤田君の声掛けにみんな同意し、4人は例のトイイレに向かつて廊下を歩き始めた。

13、開いていた訳

4人で夜の学校の暗い廊下を歩きトイレに向かう間、私は気になつていたことを彼に聞いてみた。

「ねえ、ともくん

「何?」

「どうして今日南校舎の入り口、鍵しまつてなかつたの?」

皆さんは彼女が持つたこの疑問、少し不思議に思うかも知れない。

普通高校といえば部活動や先生の残業などの関係で夜遅くまで鍵が開いていて、電気がついていることが多い。しかしこの高校は珍しくどんなに夜遅くまで練習している部活があつても、一年中夜8時前に全ての出入口の鍵を閉めてしまつ。つまりよっぽどのことがない限り、夜に学校に侵入することはできないということだ。ところが今日は私たちが南校舎の入り口に来たときにはもう8時20分前だったというのに鍵は開いていて簡単に中に入ることができたのだ。

「あー、僕ら開けといたんだよ」

「えつ、どうやつて?」

「まさか窓割つたんじゃないんでしょうね」

「しねーよ、そんなこと。予め開けておいたんだよ、1階の窓の鍵を1つ」

「そういうことか。やるね」

「まあな」

「あれ? でも警備の人が閉めちゃうんじゃないの?」

「大丈夫。それは早くても9時以降だから。それまでは閉められなつてわけ」

「そつか」

ここで4人は例の女子トイレの前に到着した。

「さてと、さつそく調べるか」

「えつ、ちょっと……」

「ぐずぐずしてる暇はないんだ。早くしないと警備の人が来ちゃうからな」

「大丈夫だよ、かな。4人一緒だから」

「……分かった」

仕方なく納得した私。いよいよ4人は女子トイレの中に足を踏み入れた。

14、開かれるドア

4人がトイレに足を踏み入れる。彼がまず電気を付ける。するとさつきまでは暗くて恐怖感を搔き立てられるだけだった空間が照らされて明るくなる。だけど昼間日撃したことを思うと、踏み出す一歩一歩が私にとつて非常に重い。だけすごく赤田君の声が私たちの歩みを遮った。

「ちょっと待つた！」

「何？」

彼女のえりちゃんがすぐに反応する。

「誰か見張りをしたほうがいいんじゃないかな？」

「あっ、そつか

「それもそうだな」

確かに彼の言うとおりである。いくら警備の人人が巡回に来るのは9時以降とはいって、それまで誰も来ないという保証はどこにもない。「じゃあ、俺がやるよ。廊下で見張つておくから、3人で調べて」「ありがとう」

「分かった」

赤田君は一人廊下に出て見張りをして、私たち3人で調べることになった。

「どこのトイレだ、かな」

彼にそう聞かれて私は4つある個室のうちの入り口から2番目を指さした。

「いいか、よし」

そう言って彼は私が指したトイレのドアを開ける。ちなみにこの学校の女子トイレは入り口に近い2つがみんな洋式で、ドアは全部外開きなつていて、

ドアが開けられて中が見えたとき、私は恐怖のあまり視線を逸らし直視できなかつた。

恐怖のあまり泣える私をよそに彼とえりちゃんはたんたんと中を調べ始める。

「特に不審な点はなさそうね」

「だな」

「ねえ、かな」

「彼女が私の名前を呼ぶ。」

「何?」

「怖がつてないで、かなも見たら?」

「えー! でも……」

私は彼女の問い掛けに首を振つて見るのを拒否する。

「じょうがないなー。じゃあ、手を握つてやるから、」

「いよ」

そう言つて彼は私の手を握り、トイヘに近づいて手を握つて握る。

「わ、分かった」

さすがに元までされると私もいつまでもびびつてゐるわけにさいかず、一步一歩トイヘに近づいて中を見る。

「どうだ? 何か気になる?」とあるか?」

「うんうん」

昼間も水を流すまで特に変わった様子はなく、今も見たと同じように思える。

「そりが。なら、水流してみるか

「そうね」

「えつ! そ、それはちょっと……」

「さすがにダメか

「う、うん」

「まあ、でも流さないわけにはいかないわね」

「えつ! ひょっと! えりちゃん」

そう言って彼女は私が嫌がつて止めるのを振り切つて、水を流すレバーを回した。

16、流された水

私は水が流された瞬間顔を隠して、見ないようにしていた。耳はふさいでいなかつたので、“ジャー、ジャー”と水が吸い込まれていく音だけが頭で響いていた。

「うーん、普通だな」

「そうね。変わらないわね」

「ほ、本当?」

どうやら一人によると水の色は変わっていないらしく大丈夫なようだ。

「うん。ほら、かなも見てみなよ」

「えつ」

「ほら、終わっちゃうから。かな、早く!」

そう言つて彼女が無理矢理私の顔を覆つている腕をつかんではなさせた。

「あつ、ちょ、ちょっと」

すると田の前に少し弱くはなつていて、吸い込まれていく透明な水が写る。ここで今さら顔を隠してもしようがないので3人で一緒に最後まで見つめていた。

「かなが見ても変化なしか」

「変わらなかつたわね」

「そうだな。念のためもう一回

「やめてよー!」

さすがに一度も怖い思いをするなんて耐えられず、私は気持ちに任せて叫んだ。

「えつ! なら、仕方ないか。じゃあ、タンクの中だな」

「そうね。開けてみましよう」

もう一度水が流されるのはなんとか阻止できたが、今度はタンクの中を一人は調べるようだ。当然に見ることなんてできるはずもなく、

再度私は顔を両手で覆つた。

「パツと見、特に何もなさそうね」「そうだな。水は透明だし、何かが取り付けられているわけでもないか」「これはかなの錯覚かもしけないわね」「それないとと思うけどな」「信じてるんだ、ともくん」「まあな。信じないわけにいかないしな」「それって彼女の言ったことだから」「いや、そうじゃない」「じゃあ、ちゃんとした理由があるってこと?」「もちろん」「ここでタンクのフタが戻された音が聞こえ、私が顔から両手を離したのと同時に彼が説明を始める。

「一番はその黒い水を目撃したのが昼間で、かつトイレの電気がちやんとついていたことだな。明るければそう簡単に見間違えるはずもないしな」「なるほどね。でもかながこのトイレの怪談話を意識していたとしたら」「それもそうか」「それはないよ。だつてこのトイレがその話の場所か、私知らなかつたもん。だから意識しないようにしてたし」「あつ、そうか。確かにこの話つて前にどこであつたかは明らかじゃないんだよな」「違うんじゃない? 本当は誰かが知つて恐怖を煽るためにそれを隠しているとか」「いや、それはない」

そう言つて彼女の意見を否定したのは、なんと廊下で見張つている

はずのかずき君だった。

1-8、恐怖のかくれんぼ

「おー、かずやー。見張ってるんじゃないなかつたのか?」
「そんな場合じゃないー。」
「どうしたの?」
「つて、まさか」
「そのまさかだよ。足音が聞こえてきたんだが、廊下に影も見えた、警備の人が見回りに来たんだよ」
「まあ、早くここから出ないと」
「そうね。とりあえず今日は切り……」
「それは無理だ」
「どうこうことだ」
「挟み撃ちなんだよ、両方から」
「おいおい、マジかよ。参ったな」
「そんな、どうするの?」
「隠れるしかないわね」
「隠れるって、このトイレの中だけでか」
「仕方ないでしょ。ここしかないんだから」
「それはそうか」
「はあ、かずきがむつと早く見つかれてれば、ここから出られたのに」
「無茶言つなよ、真っ暗なんだから」
「まあ、いいわ。早く隠れましょ」
「そうだな」
「でもどこに隠れるのよ」
「さうね。私たちは身体が小さいから、洗面所の戸棚にしましちゃう。あそこは何も入っていないはずだから」
「うん」
「一人は和式トイレのドアの裏がいいんじゃない?」

「なるほど、死角になるな」

「確かに」

「あつ、足音が今……」

「もう、そこまで来てるな、急ぐぞ」

「うん」

トイレの中を調べている途中に迎えた最大のピンチ、4人は急いで
それぞれの場所に身を隠した。

19、死角

4人は電気を消して急いでそれぞれの場所に隠れた。通常なら学校のトイレにはドアはなく、漏れ出た電気の光で誰かが中にいるのが分かつてしまつ。しかし幸いなことにこの学校の女子トイレは防犯がしつかりしていて、入り口には窓のないドアがあり、光が漏れ出る可能性はかなり低かつた。

「大丈夫かな、えりちゃん」

「しつ、静かに。声出したらダメよ」

「うん」

いよいよ足音が大きくなり一人の警備員がトイレに近づいてくる。4人は声を出さずに息をひそめてじつとしている。

トイレのドアが開いて電気が付けられ、一人の警備員の声が聞こえてくる。

「どうだ、お前、ここまで異常はなかつたか？」

「ありませんでした、先輩！」

「そうか」

「ここも異常はないみたいですね」

「そうみたいだが……、念のため調べるぞ」

「えつ、でも、ここ女子トイレですよ」

「何言つてんだ。生徒と職員はもう帰つてる、俺たちが入つても問題ねえよ」

「はあ」

本当なら入り口から見渡しだけで出て行ってくれれば、大助かりだつたのだがどうやら中まで調べられるようだ。

「入るぞ！」

「はい」

二人は洗面所には目もくれず、奥に入つて行き個室を一つ一つ開けて調べ始める。かなりまずい状況だが4人がいる場所は完全に死角

になる、相手がかくれんぼの鬼でもない限り見つかるはずはなかつた。しばらくして二人が一通り調べ終わると……、

「おいつ、誰かいたか？」

「いません」

「なら、大丈夫だな。次、行くぞ！」

「はい」

こうして今日最大のピンチは上手く隠れられたおかげで難なく過ぎ去つていつた。

20、脱出

警備の人人が出て行つて5分くらいは経つただろうか、おそらくもう近くにはいないだろうと考えられる。

「もう大丈夫よね」

「たぶん……」

「出ましょ」

「うん」

私たちが先に戸棚から出て電気を付けて、他の一人に声をかける。

「もう大丈夫よ、出てきて」

すると二人がトイレの個室の裏から出てきた。

「いやー、危なかつたな」

「だな。入つてきたときはもうダメかと思つたぜ」

「死角があつて助かつたわね」

「そうだな」

「さてと、どうする？」「これから？」

「もう終わりでいいんじやないか？ 調べ終わつたんだろ、一通り」

「うん。じゃあ、今日はもう帰るか

「はあつ、よかつた」

「そうね」

「そうね」

帰ることになつてとりあえず一安心である。4人は電気を消して、トイレから出て声を出さず息をひそめて静かに1階まで降り校舎から出る。時計の針はすでに夜の9時を回つており、門は閉まつているため金網を昇つて道路に出た。

「なんとか無事に出られたわね」

「そうだな」

「行こうぜ！」

「おう」

「うん」

ここから4人の帰り道は途中までは同じ、一緒に話しながら帰つていぐ。そこで私はさつき途中で話が終わり、聞けなくて気になつたことをかずきくんにきいてみた。

21、噂の始まり

4人並んで歩くと後ろから車が来たときに危ないので、私とともにくんは後ろを、彼女とかずき君は前を歩いている。

「ねえ、かずきくん」

私は前にいる彼の肩を叩いて呼び掛ける。

「なんだ？」

「1つ聞きたいことがあるんだけど……。」

「聞きたいこと？」

「うん。さつき、トイレにいたときこそ、かずき君が話に入ってきた「それはない」って言ったよね」

「ああ、どこのトイレスか明らかじやないって話か

「そう、それ。なんですぐに否定できたの？」

「そのことか。実はな、あの噂、最初に知つたのは多分俺なんだ」「ちょっと待つて！ それホント！？」

「マジか

「う、うそ！？」

私も驚いたが、二人も声を上げて驚いた。

「あれ？ 私が教えたんじやなかつたけ

「いや、実はそれより前に知つていたんだ。緑川先生から聞いてな緑川先生といふのは彼の担任の先生で、普段は私たちに化学を教えてくれている。年齢は見る限りでは35歳前後、赴任してもう10年になることを聞いたことがある。

「そうだつたんだ」

「毎年思い出すらしいんだ、10年前に自殺したあの女子学生のことかな」

「そんな前からいたのか」

「でも私も先生から聞いたけど、去年の6月ぐらいいに」

「俺はもう5月のときに聞いてたよ。まあ、えりから聞くまでは他

の奴には言わなかつたけどな。で、そのときにそのトイレの場所までは分からないつて言つてたよ

「だけどなんで思い出すんだ?」

「自分が初めてこの学校で受け持つたクラスの女の子だつたんだとよ。だから、なんで止めてあげられなかつたのかつて、今でも後悔しているらしんだ」

「なるほど。つてことは、いづれ先生にも話を聞かないといかな

な」

「そうね」

「うん」

「それなら、さつそく明日聞きにいかないか、放課後に。俺、今回

の話を聞いて確認しに行こうつて思つてたから」

「そうだな、そうするか

「うん」

こつじて4人は明日の放課後、噂を流したその人、緑川先生に話を聞きに行くことになつた。

22、先生の家で

噂ほど事実関係があやふやなものはない。多く人を介して伝わっていくうちに記憶の危うさで内容は変わっていくし、場合によってより魅力的な話になるように誇張されたり、改変されることもざらにある。となると一番確実なのは、その噂を最初に流した本人に聞いて確認するしかない。最もその本人でさえも記憶が定かであるか、どこにも保証はないのだが……。

トイレを調べた次の日、私たち4人は部活が終わって放課後、緑川先生の家に呼ばれていた。ただ話を聞きに行くだけで大げさだと思うかもしれないが、学校の校舎が8時以降施錠されて入ることができず、部活が終わるのが8時以降である以上、先生の家で話を聞くことになるのは必然だつた。さらに話を聞き終わつたあとは時間も遅くなり、夜道は危ないので親に事情を話して先生の家に泊めてもらうことになつていて。

先生の御主人と小学生の兄妹の一人と一緒に8人で楽しく食卓を囲み、4人それでお風呂を済ませて話を聞ける状況になつたのは夜の11時過ぎ、他の3人が寝静まつたあとだつた。

「ごめんね、遅くなつて」

「いえ、全然。今日は晩御飯まで、本当にありがとうございます」「ありがとうございます」

まずかずき君がお礼を言つて、同時にみんなで頭を下げる。

「いいのよ、気にならないで。久しぶりに大勢でご飯を食べて先生も楽しかったから。それよりも……、本題に入る前に一つ聞いていい？」

「はい」

「さつきお風呂、男女で一緒に入つたでしょ？」

「ええ、まあ」

「は、はい」

先ほどお風呂に入るときお湯がもつたいないから一人ずつ入つてと言われたのだが、考えもせず恋人同士で入つてしまつた。

「先生もあなたたちが付き合つていることは知つてたけど、もう済ませたのね、セックス」

「はい」

「まあ……」

「す、すみません」

他の3人が答えにくそうに返事する中、私はなぜか謝つてしまつた。「いいのよ、別に謝らなくて。恋人同士なら当たり前のことだから。でも、ちゃんと避妊してるのよね？」

「はい、大丈夫です」

「もちろん！」

「はい」

「なら、いいわ。それだけ確認しておきたかったから」

「じゃあ、先生。そろそろ例の話、聞かせてもらつていいですか？」

「ええ。始めるわね」

そう言つて先生のほころんでいた顔が少し引き締まり、話が始まつた。

23、施錠される訳

「えつと、白井さんが見たのよね、黒い水を」「はい」

「ここからは緑川先生の話になります」

10年前、自殺する2週間前に先生に“先生、私、見ちゃったんです、黒い水を”そう言つてきたのもあなた同じ高校2年生だったわ。今でも先生後悔してる、なんで止められなかつたんだろうつて。だけど、先生がそのとき彼女から聞いた話は本当に恐ろしいものだつた。

先生は当時、まだ赴任してきたばかりで、2年4組の担任を受けもつたの。その黒い水を見た彼女は桃山美奈つて名前でね、勉強はよくできて、どちらかといえば落ち着いた感じの子だったけど、欠席したことはなくて元気な子だったわ。で、その子が黒い水を見たと言つて先生のところに来たのは、7月も半ば、すっかり暑くなつていたわね。

白井さんは違つて見たのは南校舎3階の女子トイレ、時間は部活が終わつたあの夜8時20分ごろ、忘れ物を取りに教室に戻つてついでに寄つたときに田撃したそつよ。

「えつ、じゃあ、ちょっと待つてください、先生。今8時以降校舎に入れなくなるのつて……」

そつ。きっかけはその彼女が黒い水をトイレで田撃して、その後酷いじめを受けて最後には北校舎の屋上から飛び降りて亡くなつた。そのことが原因だつたの。

8時以降も練習している部活も私の高校には決してある。それに校舎はなぜか8時には施錠されて、誰も入ることはできなくなる。外にも一応トイレは設置されているため特に問題はないのだが、ずっと不思議に思っていたことの謎が今解けた。

「そうだったんだ、知らなかつた」

「うん」

「それで、先生。彼女はトイレで何を見たんですか」「引き続き先生の話になります

黒い水よ、多分白井さんが見たような。彼女がトイレに入ったのはさつきも言ったように夜の8時20分くらい、一番手前にある洋式の個室にね。用を足しているときは何も異常はなかつた。そして立ち上がつて水を流して、5秒ほど経つたくらい、ちゃんと流れたのを確認して外に出ようとしたとき、透明だった水が一瞬にして真っ黒に染まつた。彼女も黒い水の噂は聞いたことがあつたみたいで、恐ろしくなつて急いでそこから立ち去ろうとした。だけど手だけは洗つて帰ろうと水道の蛇口の水をひねつた、そうしたら今度は黒い水が出てきた。

「あつ、同じだ、私と」

じゃあ、10年前と同じことが起つたのね。結局彼女は叫び声を上げて一日散に逃げ帰つたそよ。

「10年前の話はこんな感じね、何か質問はあるかしり?」
「はい、先生!」
「ここで先生に質問を真っ先に投げかけたのはともくんだった。
「何? ともくん?」
「先生は黒い水の怪談話、その話のもとになつた出来事については
知らないんですか?」
「ああ、そのことね。やっぱり知りたいよね?」
「はい」
「実は先生もみんな知ってる程度のことしか知らないのよ
「そなんですか?」
「「めんね。そこまで遡るともう30年近くも前の話になつたりやう
から」
「じゃあ、仕方ないです」
「あつ、でも! 一つだけ話せることがあるかも。聞く?」
「はい、お願ひします」
「えつと、じゃあ、みんな黒い水のもの話がトイレで髪を黒く染
めていた女子生徒の話ってことは知ってるのよね?」
「はい」
「だけど不思議に思わない? 染めるのはいいことしてなぜ黒かつて
?」
「確かに……、言われてみれば」
「もしかして日本人じゃなかつたとか?」
「そう言つたのはえりちゃん、これは十分に有り得そうな話である。
「そう思つでしょ。でも実は違うの。その子病氣だったらしくの、
生まれつき毛の色素が薄い」
「えつ、それなら事情を話せば問題ないんじゃ……」
「学校側は許すわよ、もちろん。だけどじめの標的にされたみた

いね

「そつか。だからトイレで黒く髪を染めて……。あれ？ でも染め
れば大丈夫なような……」

「そうだと私も思つてたんだけどね。けれどその先はもう私も知ら
ないのよ」

「それじゃあ、他に知つている先生はいないんですか？」

「そうね。流石に30年も勤め続けている先生なんて……」

「一人いるんじゃないか？ 今はもう退職してるけど」

そう言って話の輪に突然入りこんだのは先生の御主人だった。

「あなた。まだ寝てなかつたの？」
 「ああ。ちょっと話している内容が気になつてな」
 「その、さつとき言つてたのは……」
 「橙木先生だよ。一昨年退職した」
 「橙木先生。確かにその人なら知つてゐかもしれないわね。少なくとも30年はいたらしいから」
 「じゃあ、その先生に聞きにいけば……。」
 「多分話してくれるよ。家も近いしな、案内するよ、次行くとき」
 「ありがとうございます」
 「あの、もしかして先生の御主人つて……」
 「おうつ、卒業生だよ。お前らの学校な」
 「やつぱり」
 「あれ？ でも先生の方が年上？」
 「失礼ね。これでもまだ34よ。まあ、私の方が年上なのは事実だけ」
 「実はな。俺が高校2年のときの担任でな。好きで告白したんだよ」
 「えー！ じゃあ、先生と生徒で……」
 「バカね、してないわよ。始めは断つたの。でもそれからもしつこくされて、それでこうやって一緒に暮らしてあげているのよ」
 「それはちょっと……」
 「うそうそ。本当はな、卒業式のとき」言つたらオッケーされて、それから付き合ひはじめて。いつもつて結婚もしたんだよ」
 「すごーい。いいな」
 「はあつ、もう」
 「なあ。今日しないか？ ちょっと俺、目が冴えちゃつて」
 「えつ、何言つてのよ。」この子たちの前で」
 「いいじやんか、明日は休日だし。そつだ！ お前らもしなよ、部

屋俺らと別々にするから。ちゃんとゴムもあるしな

「しようがないわね。ごめんね。この空氣読まない、おバカさんの
せいで。もう話、終わりで

大丈夫よね

「はい！ ありがとうございました」

「行きましょう」

「ゴムはその電話の置いてある棚の下開けたら入ってるから。自由
に使っていいぞ」

そう言って二人は席を立ち、寝室に行ってしまった。僕ら4人もほぼ同時に席を立つと、敷かれていた布団を持ってそれぞれ別の部屋に行き、せっかくなのでゴムを一つもらうとそれぞれ一人愛の時間を過ごした。

27、一人目

私が黒い水を目撃してから早6日目の朝、いつもより少し遅い時間に登校すると、教室がざわざわしていて騒がしく妙な雰囲気だつた。気になつてともくんに話しかけてみる。

「ねえ、ともくん。おはよ！」

「おはよう、かな」

「どうしたの？ なんか騒がしいけど」

「昨日見たらしいんだよ、2組の柴浜さんがかなが見たのと同じ黒い水を」

「えっ！？ それ、ホント？」

「ば、ばか。もっと小さな声で」

「めん」

「これはまずいことになつてきたな、早く真相を突き止めないと」

「橙木先生からはまだ話聞けないの？」

「いや、赤田君に確認したら明日には聞けるそつだ」

「そう。でも、柴浜さん、どこで目撃したんだうつね」

「それもそうだな。昼休みにでも聞きに行くか」

「うん」

どうやら黒い水を目撃したのは私だけではなかつたようだ。一人だけなら見間違いかかもしれないし、単なる幻を見ているだけに過ぎないのかもしれない。しかし一人ともなれば幻ではなく、事実だらう。これは何かこの話には裏がある、そう私に予感させた。

午前中の授業が終わって昼ご飯を済ませると、私は彼と一緒に柴田さんのいる2組の教室に向かう。確か名前は柴田宏子さん、彼女はバレー部に所属していて、部活同士の交流で一度か一度、話したのが記憶にあった。

「かなはさ、どう思う?」

廊下を歩いている途中、彼は私にそう聞いてきた。

「どうつて、何が?」

「君以外にも目撃者がいたってこと」

「えつ、分からぬけど」

本当は思つていたことがあつたけど、彼の率直な意見が知りたかった私はあえて自分の思つていたことを言わなかつた。

「そうか。これは僕の勘なだけど、この話、何か裏がある気がするんだ?」

「裏?」

「そう、裏だ。この話、もしかなが唯一の目撃者だつたら、見たものは現実ではなく、全くの偽物、つまり幻を見ていた可能性も考えられる。しかし一人となると話は別だ。そんな同じ幻を別の時間に二人が見間違えるはずがない。となると考えられるケースは二つだ」

「二つ?」

「うん。一つは誰かが女子トイレに黒い水が出る仕掛けをして、それを偶然一人の女子生徒、つまりかなと柴浜さんが目撃したケース」

「もう一つ?」

そう私が聞き返すと、彼はとんでもないことを口にした。

29、あの「」と……

「分からぬいか？ 柴浜さんが黒い水の仕掛けをした犯人で、目撃したと嘘をついているケースだよ」

「それないよ、絶対。柴浜さん、悪そうな人じやないもん」

「まあ、これはあくまで可能性の話だよ」

「ならいいけど……」

確かに彼の言つたことは可能性としては正しい、ただ前に柴浜さんと話したことがあった私はそんなことは有り得ないと確信していた。

2年2組の教室の前に着くと、彼女のことを探つていて私が中に入つて呼びに行く。彼女の席は教室の窓際、奥の端つこの方で机にノートを広げて勉強しているようだ。

「柴浜さん」

すぐそばに近寄つた私は彼女の名前を呼ぶ。

「あつ、白井さん、よね？」

「うん。今ちよつといいかな？」

「もしかしてあのこと聞きに来たの？」

「まあ」

「いいけど、何かあるの？」

そう言つられて私は彼女の耳元に口を近づけて、こつやつこつと言つた。

「実は私も見ちゃつたんだ。だから今、調べて」

「そう。分かつた」

彼女は私の話を聞くと納得してくれて、机の上のノートを片付けて席を立ち、一人は教室を出て彼と廊下で3人一緒になる。

「僕、青山知輝。よろしくな」

「うん。私、柴浜宏子ね。よろしく」

「ここじゃ話しにくいよな」

「うん」

「じゃあ、どつか人のいないところでも行こつか」

「ありがとう」

「うん」

こうして集まつた3人は彼の案内で外に出て、誰もいない校舎の裏に向かつた。

30、不思議なこと

彼女が壁を背にして立つて、私たち一人はその正面に立つて目を見つめる。最初に口を開いたのは彼ではなく、意外にも彼女のほうだった。

「私、話してもいいけど、その前に聞いておきたいことがあるの」

「ん？」

「さつき白井さん、自分も見たつて言つてたよね」

「うん」

「それホント？」

「ホントだよ。先週の木曜日の昼に、南校舎4階の女子トイレで」

「そつか。私が見たのは昨日の夜、場所は同じだったわ」

「同じか」

「それで、柴浜さんはどの個室に入ったの？ 私は手前から2番田だけだ」

「あつ、それは違う。私は一番手前の」

「なるほど。続けて」

「トイレを済ませて水を流した。そしたら途中まで透明だった水がいきなり黒く染まって、底に溜まつたの」

「蛇口の水は？」

「黒い水が出てきた」

「全く同じだな、かなが見たのと」

「うん」

「でも一つだけ不思議なことがあるのよね」

「何だ？」

すると彼女は「ひひひ驚くべきことを口にした」

3-1、仕組まれた」と

「実は私、この話、誰にもしてないんだよね」「えっ！？」

「それ？　どういうことだ？」

「私が昨日の夜、トイレで黒い水を目撃したことは事実。それは確かになんだけど、まだ誰にも言ってなかつたのよ。それなのに今日朝学校に来たらクラスのみんなが知つてて」

「ホントか？　それ」

「うん。だつて、噂の怪談話にもあつたでしょ。みんなに知れ渡つて、それで彼女は酷いじめにあつて自殺に追い込まれたつて。それを思つたら誰かに言えるはずないもん」

「なるほど。それもそうか」

「ねえ、どういうことだと思つ？」

「それなら可能性は一つだ」

「えつ、分かるの？　ともくん」

「もちろん」

「じゃあ、教えて」

「誰かが仕組んだよ、その女子トイレで黒い水が出るよつ」。それでみんなに柴浜さんが目撃したつていう噂を流したんだ」

「ちょっと待つて！　どうして私は……」

「かな、それは今から説明する。多分犯人の狙いは柴浜さんに黒い水を目撃させることだつたんだ。だけど最初に仕掛けをした先週の木曜日、かなが見てしまつた。そのとき犯人は相当焦つたはずだ、なにしろかなが目撃したことみんなに話してしまつたら、誰も夜の校舎でトイレになんて行かなくなるだろうからね。そうなると計画が台無しになる。だけど幸いなことにかなは僕にしかそのこと話さなかつた。それでみんなに広まつていなかつたことを確認できた犯人は、もう一度同じ仕掛けをして、本来の対象である柴浜さんに黒

い水を叩きさせたんだ

「そつか

彼女が告げた驚くべきことから導き出された彼の推理、黒い水の怪談話は今日最初の山場を迎えた。

32、心当たり

「ねえ、柴浜さんは何か心当たりってないの？」
「心当たりって、私が恨まれる？」
「うん」
「ないよ。だつて私いじめとかしたことないし、彼氏とかもいたことないから」
「そうか……」
「あつ、でもそういういえば関係ないとは思うけど、私のお母さん、この学校の出身だよ」
「へえー、そうなんだ」
「じゃあ、卒業したのつていつ？」
「えつとね……、今、……だから、30年近く前になるんじゃないかな」
「30年か。となると何か知っているかもしれないなあ」
「えつ、どうこうこと？」
「あれ？ 知らないのか？ 黒い水の怪談話の噂」
「知ってるよ。さつき話したでしょ」
「いや、それじやなくて。基になつたのは30年前に起きた話なんだよ」
「そうだったの！ ねえ、詳しく聞かせて」
「ここで僕ら二人は彼女に基になつた30年前の話を彼女に説明した。じゃあ、つまり私が今回見た黒い水もそこからきてるってこと？」
「そう」
「分かった。私、お母さんに聞いてみるよ、30年前のこと」
「ありがとな。今度聞いたことを教えてくれよ」
「うん。それじゃあ、私そろそろ行くね」
「ありがとう、柴浜さん」
「いらっしゃい。私も聞いてもらえてちょっと安心した。またね」

「うん

振り返つて私たちに手を振り、彼女は元気に駆けて行つた。

「よかつたな。元気になつたみたいで」

「うん。私たちも戻ろう

「だな

そう言って一人も彼女の後を追つよう教室に戻つて行つた。

33、増えた謎

赤田君の話によると30年前に学校に勤務していたという橙木先生からは土曜日の昼に話を聞けるようだ。今日は金曜日、先週の木曜日に黒い水をトイレで目撃してから1週間以上になる。昨日すでにもう一人の目撃者になった柴浜さんからも話は聞けた。そのため特にすることもなかつた私は、昼休みにご飯を食べ終わった後席に座つたまま、これまでに起きたことを含めて事件全体について考えてみた。

始まりは先週の木曜日に私が誤つて黒い水を目撲してしまったこと、全ての謎がここにつながつていて、そんな気がした。昨日の柴浜さんの話を聞く限り犯人の本当の狙いは彼女だったのだから。ただそれでも1つ不思議なのは彼女が目撲してから2日も経つているとうに噂が広まつていてるだけで、いじめが起こらないことだ。少し不謹慎なことを言えば私自身も彼女が本来のターゲットだと分かつて怯える必要がなくなり、内心かなりほつとしていた。

しかしそれはあくまで昨日の彼女の話を素直に信じるのならばだ。そう思つてみると昨日のことでもう一つ疑問がある。これは話の内容とはほとんど関係ないのだが、彼女は私たちに話しただけで不安に思うことがなくなつていないにもかかわらず、最後に離れていくとき、笑顔を見せて予想以上に元気になつていたということだった。とすると決して彼女を疑つてはいるわけではないが、話をそのまま信じて鵜呑みにするのにも問題があるのかも知れない。

大体根本的なところを見つめ直してみると、まず犯人の意図がはつきりしない。彼女に恨みがあるならこんな回りくどいことなんてしないで、ストレートに何かをしたほうがいい気がする。それに彼女

が黒い水を叩きした話を犯人自身が広めるとなると、あとでいじめが起きたときに返つて疑われる危険性があるのでないだろうか？

そう考えると誰が仕組んだというのは私たちの勝手な思い込みで、実は本当に起きてしまった怪奇現象だと可能性も十分になる。結論はどうちらにせよまだ謎を解くには手がかりがそろつていないので、そして明日の土曜日に橙木先生からどんな話が聞けるのか、その30年前に起きた出来事が全ての答えになつていて、私にはそう思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349v/>

恐怖の黒い水

2011年11月26日19時50分発行